東京学士会院と『東京学士会院雑誌』

秋山勇造

1

現在の日本学士院の前身東京学士会院は明治初頭に文部卿西郷従道の発案で、当時の日本のもっとも有力な学者たちが会合、協議して定数二一名の会員を選出し、一八七九年（明治一二年）一月一五日に結成された学者の団体である。二一名の会員は、福沢諭吉、西周、西村茂樹、神田孝平、津田真道、市川兼恭（蘭学者、砲術・造船・築城）、加藤弘之、中村正直、箕作秋坪（蘭学者、東京師範学校摂理・東京図書館長）、杉亨二（統計学）、伊藤圭介（植物学）、内田五観（数学）、阪谷素（儒学者）、重野安繹（史学会会長）、杉田玄端（医学）、川田剛（漢学者）、福羽美静（和漢学）、細川潤次郎（法学者）、小幡篤次郎（慶応義塾長）、栗本鋤雲（郵便報知新聞主筆）らで、いずれも当時の日本を代表する碩学であった。

明治八年一一月の『明六雑誌』の廃刊後、本来は学術結社だった「明六社」が親睦的なサロンに変質しはじめたころ、すでに社の内部や周辺には学者、知識人によるあらたな学術集団の結成を望む声が上っていた。またこの年

の九月には「教育令」が施行され、全国的規模の教育体制の整備が行なわれはじめていた。文部卿西郷の補佐役で、明六社のメンバーでもあった文部大輔の田中不二麿は一一年一二月に福沢、加藤、西、中村、箕作、神田、津田の七人を私邸に招き、会院設立の建議を提示して七人の意見を聴取した。七人は協議したのち、文部省の案を了承し、前記の会員選出手続を経て翌年の一月一五日に会院が設立された。会院の初代会長には福沢諭吉が選挙で選ばれたが、ほどなく西周に代った。

一二年三月二八日に開かれた学士会院の臨時会で福沢は会院創立の主旨について演説し、つぎのようにのべた。

「本会ニ於テ、学士其人ヲ求ムルニハ、職分ノ官私ヲ問ハス、名声ノ隠顕ニ拘ハラス、学徳有素ノ士ヲ得ルヲ以テ正的トナサハ、其学識文才ト、徳義品行ノ両途ニ留意シ、本院選挙ノ主旨ニ適スルヲ得ンコト、特ニ予輩ノ諸君ト共ニ企望スル所ナリ」

福沢はあらたに設置された学士会院が明六社と同じように（あるいはそれ以上に）官製アカデミーに向かうことを危惧して、会員の選出に当っては「官私」、あるいは「名声」の如何にかかわらず、才能学識とともに徳義品行の人を選ぶべきだと主張したのである。

2

会院が設立された翌年の一八八〇年（明治一三年）六月に『明六雑誌』に倣った会院の機関誌『東京学士会院雑誌』が発行された。一〇―三〇頁前後の冊子（定価十五銭）で、四六判仮綴、各冊に論説二、三篇と会院の記事が掲載され、月一回発行された。

この雑誌はその性格と内容からみて、『明六雑誌』の後継誌とみることができる。掲載論文の中には画期的で先駆的なものも少なくなかったが、論文のほとんどが会院内で講演されたもので、そのほとんどは著書に収められずに終った。

設立一一年後の明治二三年に会院の規定を改正して会員の数をふやし、村上英俊（フランス学）、箕作麟祥（法学）、大鳥圭介、黒川真頼、小中村清矩、原坦山（仏教学）、三島毅、田中芳男（植物学）、三宅秀（医学）、岡松甕谷、木村正辞、島田重礼、外山正一、大沢謙二、小藤文次郎、緒方正規、桜井錠二、井上哲次郎らのほか、日本の法典編纂に貢献したフランス人法学者ボアソナード博士も会員に加わったため、雑誌の内容がいっそう充実し、多彩になった。

また第十二編第二冊（明治二三年）に掲載された「故会員村上英俊の伝」に始まる会員（故人を含む）の評伝は、伊藤圭介、神田孝平、中村正直、市川兼恭、三島毅、栗本鋤雲、原坦山、細川潤次郎、加藤弘之、島田重礼、津田真道、木村正辞、客員ボアソナード、中村清矩、杉亨二、外山正一らについて、各人と交友のあった人たちによって書かれたもので、明治期の学術研究者に資する所が大きい。

この雑誌は一九〇一年（明治三四年）三月発行の第二三篇第三冊まで二一年間にわたって刊行された。以下に論文の題目と執筆者の名前を全部挙げてみる。

『東京学士会院雑誌』内容目次

一八八〇年（明治十三年）三月創刊
一九〇一年（同三十四年）三月第二十三編の三

編　冊　執　筆　者　論　文　題　目

明治十三年

第一、第一　福　沢　諭　吉　教　育　論
二　加　藤　弘　之　女子ノ教育
三　伊　藤　圭　介　本邦博物学起源沿革説
三　神　田　孝　平　邦語ヲ以テ教授スル大学校ヲ設置スヘキ説
附評（加藤弘之）
四　伊　藤　圭　介　博物学起源沿革説続
四　重　野　安　繹　漢学宜ク正科一科ヲ設ケ少年秀才ヲ選ミ清国ニ留学セシムヘキ論説
五　小　幡　篤　次　郎　専門学校ノ切要ヲ論ス
六　杉　田　玄　端　動植二物ヨリ産スル食物ノ生体ニ功用ヲナス略説　英・ヰリアムス「病原論」抄訳
七　西　村　茂　樹　大学ノ中ニ聖学ノ一科ヲ設クベキ説
七　杉　田　玄　端　動植二物ヨリ産スル食物ノ生体ニ功用ヲナス略説ノ続
七　阪　谷　素　森学士調練ヲ体操ニ組合セ教課トス説ノ後ニ附録ス
八　重　野　安　繹　国史編纂ノ方法ヲ論ス
附評（加藤弘之）
九　紀事　第十一号節録
同　第十二号同
同　第十三号同
紀事　第十四号同

明治十四年

第二、第一　紀事　第十六号節録
同　第十七号同
二　紀事　第十八号同
西　周　加藤先生　博言学議案ノ議
三　杉　亨　二　当院規則第一条教育ノ事アルニ因リ思ヲ起シ享二カ知ル所ノ教育ノ談ヲ述ブベシ
四　阪　谷　素　学士会院ニ著書賞格ヲ設クヘキ議案
紀事　第十九号節録
五　川　田　剛　漢学宜分経籍為修身政事刑律工芸諸科専攻其業
附　重野評
紀事　第二十号
六　阪　谷　素　著書賞格ヲ立ル儀案附録

七　杉田玄端　訳述　衣服ノ健康ニ関係アル論
八　伊藤圭介　博物学者ヲシテ支那ニ派出シ本地ヲ遍歴博衆セシクバ斯学ニ於テ発明有益タルヲ得ヘキノ案
紀事　第二十一号
九　杉田玄端　身体運動論
一〇　細川潤次郎　男女共学ヲ論ス
伊藤圭介　日本人ノ雑俗文章ニ於ケル句読段落ノ標示スルヲ以テ必要トセサルハ一欠事タルヲ弁ス

明治十五年

三、一　杉田玄端　訳述　精神ノ訓練
同　訳　嫁娶論（マリエージ）
同　嫁娶論愚見
二　神田孝平　清英戦争ノ際清兵カ英公主ヲ虜ニセシ事ノ訛伝ナルヲ弁ス
中村正直　四書素読ノ論
三　細川潤次郎　鉄鉱の事ヲ論ス
伊藤圭介　諸植物ノ中本邦自生ノ品ト異邦伝植ノ者トヲ区別シ之ヲ弁晰セント欲スルノ説
四　杉田玄端　訳　睡眠論（スリープ）
五　細川潤次郎　治虎列刺病用忍耐法説
杉田玄端　訳　通泄論（エキスクレーション）
六　細川潤次郎　虎列病ヲ治スルニ忍耐法ヲ用フルノ説ノ続
西村茂樹　性善説
七　加藤弘之　日本初世開化之源因第一
八　神田孝平　支那人人肉ヲ食フノ説
大鳥圭介　教育論
加藤弘之　人為淘汰ニヨリテ人材ヲ得ルノ術ヲ論ス
杉田玄端　訳　大気及温度論
九　伊藤圭介　桑柘説
一〇　重野安繹　風俗歌舞源流考上

明治十六年

第四、一　黒川真頼　本邦書籍刊行考
大鳥圭介　倹素論
神田孝平　万国言語一致説
黒川真頼　烟草伝来説略
杉田玄端　訳　食物
市川兼恭　五十音の錯乱
鷲津宣光　新体ヲ制定ス可ヘキ議案
伊藤圭介　本邦博物学起源沿革説拾遺
西村茂樹　日本道徳学ノ種類
細川潤次郎　洋人性ヲ論スル荀子ニ似タル事ヲ論ス
伊藤圭介　花史雑記

杉田玄端訳　両親ヨリ稟クル性質ノ説
カベルレ原著「アワル・ライフ」
重野安繹　風俗歌舞源流考下
福羽美静　用言弁誤
黒川真頼　鎌倉大草紙考

明治十六年

第五編

黒川真頼　纈　考
神田孝平　学術ノ上進ヲ謀ルノ議
黒川真頼　蒔絵考
小中村清矩　唱歌拙議
中村正直　古典講習科乙部開設ニ就キ感アリ書シテ生徒ニ示ス
附漢字ヲ治ムル工夫ヲ論ス
村上英俊　血液論訳述（六回）
血液成分論
同　西村茂樹　心学略伝上、中
伊藤圭介　花史襍記
大鳥圭介　清国五人種
杉田玄端訳　生死論訳述

明治十七年

第六編　一　小中村清矩　名字ヲ貴重スヘキ説
黒川真頼　色葉歌作者考
伊藤圭介　花史襍記一条
黒川真頼　天皇服衮冕考
杉　亨二　人生学抄訳
伊藤圭介　花史襍記二条
村上英俊　血液論続稿
二　重野安繹　陰陽五行ノ説
重野安繹　沢田新右衛門和学仕方ノ意見書
杉田玄端　浴法
神田孝平　孔子公道ヲ説カサルノ疑
伊藤圭介　花史襍記
黒川真頼　文字伝来考
杉　亨二　人生学抄訳ノ続
三　細川潤次郎　性ヲ論ス
杉田玄端　浴法
伊藤圭介　花史襍記三条
大鳥圭介　満洲人種並ニ朝鮮人種ノ変遷及彼地方歴代ノ沿革
附地図
四　西村茂樹　文章論
西　周　論理新説
村上英俊訳　血液論ノ続　血液分析
杉田玄端　灑水浴
杉　亨二　人生学抄訳ノ続
五　重野安繹　世上流布ノ史伝多ク事実ヲ誤ルノ説
黒川真頼　絵画沿革考

小中村清矩　賜爵ノ盛典ニヨリテ思ヘルコト
伊藤圭介　花襍記二条
村上英俊　疾病ノ血液
杉田玄端　飲酒論

明治十八年

第七編ノ一　大鳥圭介　支那東北諸国沿革考ノ続
神田孝平　文章論を読ム
杉田玄端　咽喉ニ梗塞セル異物ヲ除去スル説
黒川真頼　絵画沿革考
伊藤圭介　花史襍記
村上英俊（訳）　血管及血液運行
二　伊藤圭介　花史襍記
杉田玄端　男女区別ノ説
細川潤次郎　続墨子
大鳥圭介　支那東北諸国沿革考ノ続
附　地図
三　伊藤圭介　花史襍記二条
杉田玄端　男女両属体一名半陰陽之説
重野安繹　宝永富士山噴火之記
大鳥圭介　日本礼式ハ立礼ヲ用ヒ坐礼ヲ廃スル案
四　伊藤圭介　花史襍記二条
黒川真頼　絵画沿革考ノ続
杉田玄端（訳）　夢之説（ドリーム）
黒川真頼　本邦書籍刊行考追加
村上英俊訳　血液論ノ続
五　重野安繹　宝永諸国地震之記

明治十九年

第八編　一　加藤弘之　日本人種改良ノ弁
黒川真頼　本邦学問説
伊藤圭介　花史襍記
二　杉亨二　㨞㝢㝢ノ話
杉田玄端　動物論
伊藤圭介　花史襍記三条
田中芳男　動植物ノ効用
三　小中村清矩　官職ノ沿革
大鳥圭介　学問弁
西村茂樹　宗教ノ前途
四　重野安繹　隠居家督並養子ノ弊害
神田孝平　暦法改良論
原坦山　印度哲学ノ実験
西周　心理説ノ一斑
五　中村正直　杞憂ヲ誤ル勿レ
箕作麟祥　民法大意
三島毅　義利合一論

明治十九年十一月
明治二十年十一月

第九編ノ一　川田剛　日本普通文字ハ将来如何ニナリ行クカ
西村茂樹　男女相択フノ説
伊藤圭介　花史襍記六条
二　田中芳男　動植物ノ効用
杉亨二　我カ日本帝国人民ノ将来ヲ前知スルノ説ト方法
黒川真頼　大和魂ノ説
三　島毅　会人所聚日道ノ解
原坦山　社会思想ノ変遷
三　重野安繹　史ノ話
小中村清矩　古代文学論
伊藤圭介　花史襍記七条
四　加藤弘之　男尊女卑ノ是非得失
中村正直　漢学不可廃論
五　大鳥圭介　印度志
細川潤次郎　剛柔説
伊藤圭介　花史襍記
三　島毅　修身衛生理財合一論

明治二十一年

第十編ノ一　三宅秀　医ニ対スル公衆ノ注意
加藤弘之　東洋ノ一大問題
杉亨二　国人身上ノ有様ト年齢トヲ見テ其ノ国ノ盛衰ヲ知ルヘシ
二　黒川真頼　衣服ノ説
西村茂樹　日本ノ文学
伊藤圭介　花史襍記
原坦山　動植二原論
三　杉亨二　飢ノ説
細川潤次郎　美術ニ関スル剛柔説
伊藤圭介　花史襍記
四　三島毅　崇神論
小中村清矩　古代宗教論
五　川田剛　自主ノ説
三宅秀　病院ノ説
六　加藤弘之　天地万物皆帰吾有
大鳥圭介　女子教育主義
七　小中村清矩　古代宗教論余
西村茂樹　日本ノ文学　続
八　中村正直　報賞論
伊藤圭介　花史雑記
九　重野安繹　周孔ノ教
伊藤圭介　花史雑記
十　神田孝平　東西地主考
西村茂樹　日本ノ文学　再続

明治二十二年

十一編ノ一　重野安繹　史話第六回徳川綱吉事蹟
杉亨二　家ト眷属トニ就テすたちすちつ

くノ解釈
二　加藤弘之　政事ヲ以テ任スル者ハ社会学ヲ修メサルヘカラス
大鳥圭介　印度古代宗教概論
伊藤圭介　花史雑記
三　三島毅　貨殖伝ノ大意
原坦山　三験説弁金剛解
伊藤圭介　花史雑記
四　小中村清矩　女帝論
重野安繹　大政帰朝ノ原因
五　田中芳男　教育ト美術トノ関係
中村正直　古今東西一致道徳ノ説
六　細川潤次郎　交際ノ変遷
黒川真頼　家屋建築論
七　三宅秀　医士ノ職掌
大鳥圭介　同化論
伊藤圭介　花史雑記
八　杉亨二　社会ノ事実ハ方法ニヨラサレハ知ルヘカラス
西村茂樹　西国道徳学ノ主義
九　加藤弘之　兎角物事ハ潔白ナル道理ノミニテ成就セヌモノナリ
重野安繹　本邦ノ仏教
十　川田剛　儒者不食説
三島毅　強肉弱食説
伊藤圭介　花史雑記

明治二十三年

十二編ノ一　加藤弘之　此目の細工は甚だ拙し速に細工人に戻すべし
原坦山　仏教古今の実況
二　小中村清矩　文章論
岡松甕谷　論孟懿子問孝之章
故会員村上英俊の伝
三　細川潤次郎　論決闘
加藤弘之　立憲政体と自治制度
会員理学博士伊藤圭介の伝
四　川田剛　自著外史弁誤の話
西村茂樹　日本教育論
伊藤圭介　花史雑記
会員神田孝平の伝
五　重野安繹　学問は遂に考証に帰す
加藤弘之　宇内万国の協同
会員文学博士中村正直の伝
六　中村正直　堪忍世界の説
日本中学教育の意見
ハウスクネヒト　会員市川兼恭の伝
七　西村茂樹　日本教育論　続
伊藤圭介　花史雑記

会員三島毅の伝
八　三島毅　古礼即今法の説
木村正辞　日本にて製造したる文字の話
会員栗本鋤雲の伝
九　杉亨二　家は国の本なり
田中芳男　忘の話
十　黒川真頼　政事刑事の本義
原坦山　心身実究
杉亨二　精身の養生
会員原坦山の伝
東京学士会院規程並会則

明治二十四年

十三編ノ一　西村茂樹　日本教育論　再続
岡松甕谷　神識は各々其人に存す
二　三宅秀　肺病新治療法に就て
伊藤圭介　花史雑記
三　細川潤次郎　予算論
加藤弘之　不得為槌則不得為砧
伊藤圭介　花史雑記
四　重野安繹　外人内徒論
三島毅　尚書今古文九家系表
会員細川潤次郎の伝
五　杉亨二　富国強兵
栗本鋤雲　遺老瑣談
木村正辞　左尊右卑の説
六　杉亨二　富国強兵続
田中芳男　水産の話
七　小中村清矩　租庸調略説
伊藤圭介　花史雑記
三島毅　公論是れ凡論の説
会員文学博士加藤弘之の伝
八　西村茂樹　良心論
黒川真頼　古代婦人のよそほい
九　加藤弘之　利己乎徳義乎
伊藤圭介　花史雑記
重野安繹　史話徳川幕府徒党を禁ず
十　細川潤次郎　仁の説
小中村清矩　租庸調落説　続
伊藤圭介　花史雑記

明治二十五年

十四編ノ一　西村茂樹　順序論
原坦山　人体新説
伊藤圭介　花史雑記
二　杉亨二　富国強兵　続
細川潤次郎　仁の説　続
島田重礼　和漢薦挙考
伊藤圭介　花史雑記
会員文学博士島田重礼の伝

三　島田重礼　和漢薦挙考　続
田中芳男　萱の話
伊藤圭介　花史雑記　目録
四　加藤弘之　空物時
伊藤圭介　花史雑記
木村正辞　歴史と万葉集との関係
五　小中村清矩　神道
伊藤圭介　花史雑記
三島毅　孔子伝釈仁の説
六　重野安繹　日本と封建の制なし
西村茂樹　刑罰論
七　黒川真頼　古代婦人のよそほひ
伊藤圭介　花史雑記
八　細川潤次郎　楠氏遺聞
杉亨二　富国強兵　続
伊藤圭介　花史雑記
九　川田剛　書は美術たるの説
十　島田重礼　釈尊考
田中芳男　天造物の利用

明治二十六年

十五編の一　加藤弘之　開化と戦争
木村正辞　古書を訂正する方法を論ず
二　重野安繹　武士道は物部大伴二氏に興り法律政治は藤原氏に成る
伊藤圭介　本邦博物家拾遺
三　島毅　勤王在勤民論
津田真道　知識の程度
三　西村茂樹　道徳頽敗の原因
四　小中村清矩　古代法律と現行法律
黒川真頼　日本書紀を読む心得
五　三宅秀　欧州治術の進歩
杉亨二　富国強兵の妨害
六　加藤弘之　新刊拙著（独逸文）の大意
木村正辞　天下功労に誇らざるものありや
伊藤圭介　花史雑記
会員津田真道の伝
七　島田重礼
杉亨二
伊藤圭介
会員木村正辞の伝
八　津田正道　理
田中芳男　羊の話
伊藤圭介　本邦博物学起源沿革説拾遺
九　細川潤次郎　十二支考
西村茂樹　人を謗る弁
伊藤圭介　花史雑記
十　加藤弘之　ならぬ
重野安繹　文体

明治二十七年

十六編の一　三島毅性の説　津田真道
物不斉論　伊藤圭介
博物家沿革雑誌拾遺

二　杉亨二
社会の病弊　重野安繹
異学禁　伊藤圭介
博物家沿革雑誌拾遺

三　重野安繹
異学禁　伊藤圭介
博物家沿革雑誌拾遺

同　伊藤圭介
錦窠古瓦譜

四　田中芳男
綿と砂糖（綿の分）　杉亨二
社会と病弊　伊藤圭介
錦窠古瓦譜

五　三宅秀
薬の説　黒川真頼
日本書紀を読む心得　伊藤圭介
錦窠古瓦譜

六　小中村清矩
大極殿　細川潤次郎
天文板論語考　伊藤圭介
錦窠古瓦譜

七　木村正辞
百済貢献の千字文　加藤弘之
孔子の道と徂徠学　津田真道
天下国家　伊藤圭介
錦窠古瓦譜

八　田中芳男
綿と砂糖（砂糖の分）　島田重礼
百済所献千文考答或人間

九　細川潤次郎
教育意見　津田真道
教学　伊藤圭介
錦窠古瓦譜　木村正辞
百済貢献千字文及古註千字文　杉亨二
社会の病弊　島田重礼
百済所献千文考駁論の答

明治二十八年

十七編の一　西村茂樹
地球の話　川田剛
支那衰弱の理　木村正辞
千字文再論に答う

二　黒川真頼
日本書紀を読む心得　小中村清矩
武家の政治　木村正辞
千文字再答の補正

三　杉亨二
社会の病弊　大鳥圭介
東方人種の資性異同　箕作麟祥
行政裁判学

四　津田真道
唯物論　木村正辞
史学家の沿革　客員ギスターヴ・ポアソナード・ド・フォンタクビーの伝

五　加藤弘之
各国憲法の異同　重野安繹
武強文弱

六　同　右続

杉　亨二　社会の病弊
七　加藤弘之　責任論
重野安繹　古文書学
八三　島　毅　学問の標準
伊藤圭介　花史雑記
井上哲次郎　釈迦は如何なる種族なるか
西村茂樹　宗教論
故会員文学博士小中村清矩伝
十　島田重礼　徂徠学の話
伊藤圭介　花史雑記
黒川真頼　物語絵詞の説
津田真道　薄葬説

明治二十九年

十八編ノ一　島田重礼　清儒学案
三　宅　秀　医学応用の新領地
十八ノ一　津田真道　開化の行歩
医学博士大沢謙二の伝
二　大島圭介　東方人種資性の異同
津田真道　唯物論の二
田中芳男　我邦物産の起源
三　外山正一　新体詩並に朗読法
四　津田真道　性　説
木村正辞　音韻学の要領
五　杉　亨二　人の死と生
細川潤次郎　武士道
津田真道　唯物論の三　力論
同　四　天論
六　同　加藤弘之　ヘッケル博士の一種の淘汰論
大沢謙二　経験説
七　重野安繹　源義経
津田真道　大学に所謂格物致知に就て
八三　島　毅　仁斎学の話
黒川真頼　上古の外交
津田真道　我国に於ける儒仏両教
九三　宅　秀　殖民事務に医学の応用
西村茂樹　欲の解
十　津田真道　希臘二賢の語に就て
大鳥圭介　徳育は国民の資性に従ひて斟酌すへし
島田重礼　本朝諸儒の経説を評す

明治三十年

十九編ノ一　津田真道　唯物論の五　鬼神論
杉　亨二　亡国亡民
木村正辞　五十音図の説
二　田中芳男　近年移植の草木
津田真道　唯物論の六　進化論
井上哲次郎　釈迦祖先に関する研究（其一）
木村正辞　皇　考

田中芳男　巨鼈の説明
三　加藤弘之　社会生存の二方面
津田真道　唯物論の七　良心論
重野安繹　本邦兵力の転遷
四　井上哲次郎　教育上に於ける世界主義を難ず
黒川真頼　上古外交の情実
津田真道　封建論
五　細川潤次郎　新宗教即極致教
津田真道　唯物論の八　欲の説
六　杉亨二　国の零落と滅亡
六　三島毅　孔子非守旧家弁
伊藤圭介　花史雑記　南天燭
田中芳男　台湾産蓮紙
七　重野安繹　本邦兵力の転遷　続
西村茂樹　教育一斑
田中芳男　大枇杷
八　島田重礼　本邦古代の経学と唐代の学制との関係
津田真道　唯物論の九
九　杉亨二　希臘の衰亡とマセドニヤ歴山大王
田中芳男　南京虫並に駆除法
十　大鳥圭介　日清交際の将来
木村正辞　日本古代字書の説

明治三十一年

田中芳男　泊夫藍
第二十編一　三宅秀　嗜好品の応用に就て
二　加藤弘之　表裏反対の間違づくし
重野安繹　北海道談
田中芳男　やまびは
三　黒川真頼　中古絵画種類名称の弁
田中芳男　山水は国の財本
同　露兜樹
津田真道　唯物論の十　心魂論
四　加藤弘之　生存の需要
島田重礼　校勘之学
杉亨二　羅馬の盛衰
五　同　同　上　続
緒方正規　狂犬病予防の話
津田真道　唯物論の十一　文武
六　木村正弁　日本古代字書之説　続
加藤弘之　性善悪に就きて
大鳥圭介　支那語学を勧むるの説（漢文訓読法の廃棄）
田中芳男　駆虫菊之解
七　大沢謙二　蟻蜂は精神作用を有するや
西村茂樹　蓄妾論
八　加藤弘之　宇内一国成否の一大問題

井上哲次郎　新国字確定の時機
田中芳男　「カヒラギサメ」及靶鮫
九　井上哲次郎　新国字確定の時機　続
津田真道　唯物論の十二　夫婦説
重野安繹　薩藩の開国主義
十　杉亨二　羅馬の盛衰　続
黒川真頼　上古外交弁
十　田中芳男　風露草

明治三十二年
第二十一編ノ一

桜井錠二　国家と理学
田中芳男　蟒蛇と天狗に就て
二　加藤弘之　利己的功利道徳
木村正辞　勲位の説
田中芳男　薯蕷の説
三　大鳥圭介　清国に対する古今感情の変遷
津田真道　唯物論第十三唯心論の弁妄
宮崎道三郎　律令に就て
田中芳男　英領北亜米利加産犬鮭
四　加藤弘之　道徳と法律と牴触する場合ありや否や
田中芳男　烟草代葉
加藤弘之先生経歴概要
杉亨二先生略伝
五　重野安繹　常用漢字文

杉亨二　羅馬貴族の腐敗
六　重野安繹　常用漢字文　続
小藤文次郎　支那の地質構造
田中芳男　百合樹
七　大沢謙二　生体と国家
緒方正規　麻刺利亜の予防に就て
八　西村茂樹　臣道を論ず
津田真道　我国政体の変遷
大鳥圭介　士族
九　桜井錠二　滲透圧に就て
杉亨二　統計講話
田中芳男　玉箒の説
十　木村正辞　被帽と脱帽
三宅秀　ペストの話

明治三十三年
第二十二編ノ一

宮崎道三郎　質屋の話
田中芳男　穿山甲（解説及図）
二　加藤弘之　吾人の意思と教育並び刑罰の関係
小藤文次郎　地球の話
田中芳男　高脚蟹　一名脚高蟹
三　同　枇榔の説
重野安繹　大日本史三特筆に就き私見を述ふ
四　根本通明　君子有軽重

緒方正規　空気中の塵埃に就いて
田中芳男　蛇脱皮解説
四　故外山博士小伝（肖像）
五　津田真道　唯物論十四（臆説の弁）
加藤弘之　一国内の道徳と国交上の道徳とは大に其目的を異にす
杉亨二　独裁統領スユルラ死後の羅馬
田中芳男　玉磨砥石（解説及図）
六　大沢謙二　右利きと左利き
西村茂樹　学校の徳育方案
田中芳男　藻玉之弁
七　木村正辞　歴史と万葉集
大鳥圭介　米
三島毅　学問唯知の説
田中芳男　オランダガラシ解説
八　桜井錠二　天然と人工
坪井九馬三　羅馬の起源に就て
九　宮崎道三郎　手附の話
十　重野安繹　雑考
根本通明　支那上古の教育
津田真道　唯物論の十五

明治三十四年
第二十三編
ノ一
加藤弘之　万国平和会議に就て
木村正辞　天武天皇の新宇
田中芳男　日影蔓　解説及図
二　同　近年移植の草木　続
緒方正規　ペスト病毒の伝染に就て
三　田中芳男　近年移植の草木　続
重野安繹　漢学研究の方法
以上

3

東京学士会院における福沢の活動は明六社のときと変らず、定例会には休まず出席し、発言も識見に富み、活発だったという。ところが福沢は一三年一二月四日付で学士会院脱退届を会長の西周に提出した。これに続いて慶応義塾での福沢の片腕小幡篤次郎も同月一二日付で脱会届を提出した。福沢の届には、「迂生儀老懶加るに家事多端世務を顧る能はず、就ては本院の座末に列るも有名無実自から安じ兼候に付、会員除名に相願度此段宜敷御取計奉願候也」とあり、小幡も、「近来多病」、「教育上寸分の微功なく」などの理由をあげているが、当時福沢はまだ四十代半ばの働き盛りで、これでは脱退の表向きの理由にもなっていない。何よりも小幡と連袂して退会届を出しているところに、彼の積極的な脱会の意志がみてとれる。

明六社の場合は、ともかく森有礼という個人の発案と熱意から出発したのだが、東京学士会院は、会院規則（九条から成る）の最初に「本院ハ文部省ノ起立ニ係リ教育ノ事ヲ議シ、学術技芸ヲ討論スル所タリ」とあるように、最初から政府の発案と指導のもとに設立されたものであったから、明六社時代から引きずってきた官と民の対立が設立と同時に顕在化した。しかも福沢が脱会届を出す前に、脱会の引き金になるような事件が起っていた。それは会員が三百円の年金を貰うことを規定している「会員規則」に関して、福沢は「学士会院積立金案」を提出して、三百円の年金から五十円を会院集会の経費に当て、残りの二五〇円を積立てるというもので、積立金は将来の会院の改良資金にするか、後進の学士の援助に当てるというものであった。実利実業を重んじる福沢は、会員が社会的になんら具体的に貢献することなく高額の年金を受け取っている不合理を是正しようとしたのである。しかし院内の反応は冷たく、加藤弘之、神田孝平ら、政府から俸給を得ている会員からは直接反撥があった。しかし新聞や雑

誌はこのような会院内の対立の詳細を報じることを禁じられていたはずだから、福沢の案は外部の人たちに知られることもなく、院内の多数の賛同を得るに至らず、会員たちは今までどおりの特権を得た。こうした会院内の動きの背景には、教育行政組織としての体制を整えつつあった文部省の発言力の増大ということがあった。明六社から引きずってきた官民対立の構図が教育行政の中枢となる文部省の設立によっていっそう複雑なものになった。福沢は学士会院が文部省によりかかることを嫌い、文部省の意見よりもむしろ社会一般の「公議輿論」に頼ろうとした。たとえ会院での建議が文部省に採択されなくても、社会一般の支持を得るように努力することに会院の存在意義があると彼は信じていたのである。『明六雑誌』出版中止の建議案を提出したときと同じ精神がここにもみられる。そこには彼の慶応義塾経営の実績からくる自信もあったであろう。「私学」を代表する福沢と小幡が去ることによって学士会院がいっそう官僚色を強めることは明らかである。だが福沢は彼の「私立為業」の立場を守るために、あえて会院脱退の道を選んだのである。

こうして東京学士会院は一時的にせよ文部省の政治的支配下に置かれることになった。翌明治一八年の一二月二二日には内閣制度が発足し、明六社の社長だった森有礼が伊藤内閣の初代文部大臣に任命された。これと軌を一にして森のほかにも明六社の主要メンバーの多くが日本の近代教育行政に関与していくことになる。

思えば明六社結成当初福沢が志向した「私立為業」の立場は、東京学士会院が設立されたときすでに限界に来ていたのである。異端者でありながらなお組織の中心人物であり続けることはもはや不可能になっていた。このように、福沢の東京学士会院脱退事件は、強烈な個性を持った一人の明治の知識人とあらたに出現した官僚集団の対立の一つの縮図であったとみることができる。